令和元年（2019）
阿づまの光
6月号・Junio

【聖地土・クマノミズキ釉】

教主さまお作　灰釉茶盌「剣」

題字出口直日

通巻第６０３号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 猪子 恒
〒110-0008
東京都台東区池之端 2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

わたくしの心しなくば自ら
愛善の徳そなはるものなり

出口王仁三郎聖師

一歩一歩ずつ

人類愛善会理事　小林龍雄

新元号「令和」には「人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ」との意味が込められているといいます。三代教主さまが生涯を通じて、短歌、茶道、能楽、書道などの伝統文化への精進をなされ、大本の教風に育て上げられたことに思いをいたし、「令和」の御代には反省の上に自然環境や文化、芸術を護り、育てる日本であってほしいと願っています。

「令和」とともにいま注目を集める『万葉集』ですが、ＮＨＫ・ＢＳ番組が『平成万葉集』を放送しました。短歌人口百万人ともいわれる中、人々が日々の生活の喜怒哀楽や懸命に生き抜いている姿を三十一文字と映像で綴った番組でしたが、感動とともにあらためて短歌のもつ力を感じました。

大本では短歌に親しむ機会も多く、聖師さまは、

「歌を詠まぬものはいかなる力のある人であろうとも、断じて神業の第一線には立てぬ。そのつもりで各自勉強するがよい。忙しいからとか、下手だからだとか、上手によめたらだの、そのからやたらが一番いけない。まずくてもだんだん詠んでおればよく詠めるようになるものである。神徳は努力の上に加わるのである」（玉鏡）

とご教示なされ、私もみ教えに背中を押され、退職を機に一念発起して短歌を始めてみましたが、精神的な努力の足りなさゆえに、毎月の『木の花』誌の締め切りに四苦八苦しています。

それでも三代教主さまの、

「作歌することによって、私たちは、私たちの魂の質を緻密にしてゆくことができ、それによって、私たちの人生に潤いを与えてくれるものと思っています。作歌することは、精神に反省力をつけ、統一力をつけ、そして向上せしめる力となるものを、把握せしめてくれるようにおもわれます」（こころの帖）

とのお示しを胸に、一歩一歩と進んでまいりたいと思います。

皇道大本と二度の弾圧

～光明世界を見すえて～

国から受けた２度の弾圧はえん罪でしたが、特に昭和 10(1935) 年の２次弾圧は「大本を地上から抹殺せよ」との大号令のもと徹底的に行われました。「皇道大本」を名乗ったことが当局を刺激したとも言われています。その時、王仁三郎は何を思い、何を願ったのでしょうか。

大本は、明治25年、出口なお開祖の神懸りによって開教し、「世の立替え立直し」を唱える預言宗教、世直し宗教です。教団名「大本（おおもと）」は、開祖の著したお筆先に数多く記され、これが起源と言われています。また、開祖が三女の福島久子に伝えた言葉に「ここが世界の大本となる尊い地場、世界の大本じゃから…」という史実も残っています。

出口王仁三郎聖師が大本入りをしてから、組織化が図られ、組織としての名前を持つようになり、資料のように「金明会」「金明霊学会」「大日本修斎会」「大本」と名称を変えていきます。そして大正5年と、昭和8年「皇道大本」と名乗り、ちょうどその時に2度の弾圧を受けています。

大正日日新聞の買収と第一次弾圧

大正時代に入り、大本は飛躍的に教勢を拡大していきます。明治末には85戸約400人だった信徒が、「大正10年には30万人にも達している。当局の取り締まりがゆるいからではないのか」という帝国議会でのやり取りが残っています。

綾部に印刷所を設け、当時、希だった活字による布教宣伝を始めます。これにより北海道や奄美など「飛び火」するかのように教えが広まっていきます。大正5年には、知識人の浅野和三郎が入信し、海軍にも広まり、全国的な展開になると、非公認宗教だったこともあり、当局の監視の目が注がれるようになります。

綾部では本宮山を、亀岡では城跡を入手し、東京へも進出する中、大正8年、公安当局の最初の調査が入ることになります。

当時、京都の地方紙に発表された調査結果をみると、なぜ弾圧されたのかがわかるような気がしますので紹介します。

当局の質問を個条書きにしてみると、

①「皇道大本は宗教なりや？」
②「世の立替え立直しとは何ぞや？」
③「綾部町が帝都たるとは如何？」
④「立替後の状況は如何？」
⑤「鎮魂帰神は催眠術？」
⑥「皇道大本と修斎会の関係は？」

など、大本が国難到来、世界戦争、綾部遷都など世人を惑わし、不安をあおっていることを追求しようとします。これに対し、王仁三郎と浅野和三郎は、お筆先を基に、いろいろと答えるわけですが解消されず、すぐさま2回目の調査が入ります。

そこで聖師は、第1回調査の答えを全面的に否定して、「いずれにしても悪い話が伝わったは自分が悪い」「従来の大本はある点で浅野教、宣教の内容、方法を改める」「神意に悖（もと）る人は辞めてもらう」と答えました。

検挙の直接のキッカケは、大本が当時、「朝日」「毎日」に並ぶ「大正日日新聞」を買収したことによるとされています。日刊紙が復刊すると、そこには「天の岩戸開き」「世の立替え立直し」が一面を飾っていたのですから、やむを得ないと言えましょう。

出口聖師、浅野和三郎ら3人が検挙され、本宮山神殿が破砕され、開祖のお墓の改修が命じられます。

しかし、大本は平穏で、教団ならびに信徒の動揺はほとんどありませんでした。それはお筆先で「大正10年には大変な事態が起こる」と預言されていたからです。事件、逮捕、裁判だったと理解したのです。

事実、第1回の公判が始まると、すぐに聖師は『霊界物語』の口述・出版を開始します。さらにエスペラントを採用・普及し、自ら「宗教上の理想国家を建てる」として、何と責付出獄中にも関わらずモンゴルに出かける壮挙に出たりもします。大正14年には、欧州に宣伝使を派遣、北京で「世界宗教連合会」を発会、続いて「人類愛善会」を創設します。

裁判には無関心そうな聖師でしたが、公判は一審、二審と進み、同年、大審院で差し戻しの判決が出ます。しかし、すぐに大正天皇のご崩御により、大赦令の「免訴」が出て終息します。結局は、当局にとっては「振出しに戻った」ということであったと思います。

この時代、さまざまな宗教や団体は、いわゆる弾圧を受けます。そして、おとなしくし、教義や方針、組織を変えていく中、「大本は、曲げなかった」わけで、これが次の伏線にもなったのです。

大本を地上から抹殺・第二次弾圧

昭和10年までのこの期間は、大本の歴史の中で「第二次黄金期」と呼ばれています。大正期を上回る教勢伸長の時代で、『愛善新聞』100万部達成、昭和神聖会会員1千万人獲得などのスローガンが流れました。綾部、亀岡両聖地の造営が進み、たくさんの建物が建っていきます。

昭和3年3月3日、新たに「みろく大祭」という祭典を行います。仏教で預言されている「みろく下生の宣言」で、これが後に「国家転覆の結社」という言いがかりになるんですが…。そんな中、聖師は「子たる宗教はやや育ったので、親

～21世紀・生きがい講座～

猪子（いのこ）　恒（ひさし）
大本東京宣教センター長

たる芸術を育てる」と俄然、芸術を奨励し、自らも創作と実行に出ます。

宣教も怠らず、昭和青年会、武道宣揚会など組織活動も盛んにします。

二次弾圧の直接のキッカケは、昭和神聖会の発会です。東京九段の軍人会館に入り切れないほどの人を集め、政界、軍部も参加して内外の注目となりました。

内務省は、杭迫軍二に命じ内偵をはじめ、一年ほどかけて「不逞結社の組織を認定」し、「王仁三郎は、自分が天皇になろうとした」というストーリーを作り上げたのでした。

弾圧は「地上から大本を抹殺する」として、すべてのことが進められました。全国で3千人以上が取り調べを受け、千人ほどが検挙されます。裁判が始まってもいないのに、解散命令、全教団建造物破却処分発令が出され、不法な手段で土地、備品、機械まで処分されます。しかも、時価の百分の一以下で、これは裁判費用が大本に入らないようにするためです。

取り調べ、拷問は峻烈を極め、獄死者、自殺者も出てます。全国で信徒らは、国賊、逆賊と呼ばれ、村八分、降格、減給、離職、転職、子どもたちまでが「いじめ」られ、これらは戦後もなかなか消えることはありませんでした。

本当に新聞は「明治25年からの…大本も根こそぎ地上から消された」と報じたのです。

ところが、昭和17年、二審の高野綱雄裁判長の英断により「治安維持法無罪」が出されます。昭和20年、大審院でも上告が棄却され「無罪」が確定し、大本も「国家による損害賠償を放棄」します。

こうして大本は、戦後の復興とともに新生の道をあゆむことになります。

皇道と万世一系の道

ところで、教団の組織名とはいいながら王仁三郎が「皇道大本」とした、その皇道とは一体どのようなものなのでしょうか。

日本はというと明治維新で王政復古、神祇官、太政官の復興、五カ条の御誓文に次いで「大教宣布の詔『治教を明らかにして惟神（かんながら）の道を宣揚すべし』」を発しますが、結果は「神道の国教化に失敗」し、「神道は宗教に非ず」に転換します。その施策、体制は終戦まで続くわけですが、治教としての神道は、だれも布教できなかったからです。それを自ら行ったのが王仁三郎であり、「皇道大本」だったというわけです。

明治31年から約10年間、高熊山修行、大本入りをし、お筆先とともに「皇道」を探究したと言われ、その頃、聖師は実弟の上田幸吉氏にあて、京都から「われ、皇道の真髄を得たり」と伝えています。

それは、ご教示ではなく、私の言葉になりますが「宇宙の根源神、天御中主（あめのみなかぬし）大神（おおかみ）、つまりゴッド、ヤーヘ、ゼウス、アッラー、天、極を基として連なる万世一系の道」となると思います。

では今日、皇道をどう理解するのか、それは、聖師の皇道論の精神論と具体論の両方を総合的、かつ霊主体従的にとらえてみるのです。例えば、内なる心、精神、霊として、「皇道は、高道、公道、光道、厚道、広道…で、その広大無辺なる事は、測知する事が出来ません。…実にスミキリである」（惟神の道）、さらに「天が下を安らけく知ろしめす天皇の道を始め、宗教、倫理、科学、実業等一切の根本原理を説く教えである」（玉鏡）です。

一方の具体論を大正期、『神霊界』に発表された「日本神国に君臨し、地球上における主、師、親の三徳を具備し給ふ天津日嗣（あまつひつぎ）天皇が…」としてみると、どのようにして実現されるについては埋めきれない部分が多いですが、到達点が見えるような気がします。

皇道が到達する世界

最後に、皇道が到達する世界の具体的な姿を挙げてみます。

①世界大家族制度の実行
②貨幣経済、経済至上主義の否定
③社会主義、共産主義に非ず
④天産物自給の国家経済
⑤天理の住まい
⑥天恵資源の開発利用
⑦古事記は皇典
⑧租税制度の撤廃

また、社会改造のためには、教育が不可欠であるとして、小、中、大の国民教育論も明確に示しています。

天産物自給経済については、近年では、キューバ危機を救ったプラウト主義※が近い在り方として知られてきています。

私自身も、まだまだ勉強不足で理解できないのですが、しかし、全世界の平和、調和というものを考えると、中心が2つも3つもあっては治まらないわけで、一つの中心によって治まる皇道こそ、世界を救う道だと考えています。

掲載文は、平成30年12月19日に航空会館（港区新橋）で開催した「21世紀・生きがい講座」講演録の要旨です。

※プラウト主義：持続可能で、公平な社会をめざす経済学の理論

東光苑月次祭

東光苑月次祭・市杵島姫命例祭は、令和元年5月12日午前10時30分から、斎主・加藤道明祭務課長のもと執行され、309人が参拝した。

祭員は東京主会が、少年祭員は同主会の深津日向大さん・成田小巻さん・成田かさねさん・玉置巴さん、伶人は二絃の会関東支部、大本神諭拝読を志村寿隆東京主会長が、添釜は埼玉主会が担当した。

祭典後、教主さまのみろく大祭ごあいさつを拝聴。続いて猪子恒東京宣教センター長があいさつしたの後、小林龍雄人類愛善会理事が5月26日の「第35回世界連邦日本大会in東京2019」について案内。また後継者育成部が8月13日から15日に亀岡・天恩郷で開催される「第21回大本少年祭」へのプロモーションビデオを放映した。

その後、能舞台で、茨城主会による愛善歌『恩恵』が奉納された＝写真上。

東光苑少年祭式講習会

東光苑少年祭式講習会が4月27～29日の3日間、東京宣教センターを会場に開催され、少年3人が受講した。

参加者は全員、初級クラスを受講。基本動作から後取動作、祓式行事までを実習した＝写真。また、中里洋大本青年部長による「お給仕の仕方」の実習や「大本の神さまのお話」などを受講したほか、上野動物園を散策し親ぼくを深めた。

受講者からは「初めて祭式講習に参加した。玉串の扱いなどを学ぶことができ、とてもいい体験になった。また参加したい」などの感想が聞かれた。

企業安全繁栄祈願祭

第37回企業安全繁栄祈願祭は、4月21日午前10時30分から執行され、71人が参拝した。

祭典では、全国から申し込まれた206社の企業名を読みあげ、世界経済の発展と繁栄、各企業とその社員の健康、安全を祈願した。

祭典後、インタビュー形式による講演会を開催。登壇者は山田眞（㈱熊野屋取締役営業本部長）、朝倉剛太郎（朝倉染布㈱代表取締役社長）、松浦威日（㈱マルタツ理事、企画・営業本部企画部長）の3氏。企業運営に携わる心構えやご神徳談などをそれぞれに紹介。最後に山田さんが「仕事は自分の会社に直接携わっていないところ、目に見えないところも含めてお世話になっているという感謝の気持ちを持つことが大切」と述べ、参拝者に感銘を与えた。

「霊気のかたち」講演会

東博研究員迎え講演と作品展（神奈川）

神奈川主会は4月27日、鎌倉芸術館を会場に文化講演会「霊気のかたち～出口王仁三郎とすみこの芸術」を開催し、一般市民35人を含む90人が来場した。

講師は東京国立博物館研究員の三田覚之氏。三田氏は、『霊界物語』『おさながたり』など大本のご教示や東京国立博物館所蔵の美術工芸品を紹介しながら、耀盌をはじめお作品の特徴を説明。「大本の芸術は単純に造形美を求めたものではない。神の内流とも言うべき神人合一の状態で生み出されたその形は、霊気の具現化とも言える。信仰的な見地を外した鑑賞は充分ではなく、見る者・使う者もその霊気を感じ取ることで神の内流に触れ合うことができるのでは」と述べた。

また、お作品展示コーナーでは、耀盌「天つおとめ」「紅」「天国五」「吉野山」や、聖師さま、二代教主さまの書画8点が展示され、来場者に感銘を与えた。

21世紀・生きがい講座

第194回21世紀・生きがい講座は4月17日、港区新橋の航空会館で開催され、柿崎哲男特派宣伝使が「人生に大切な四つの原理～大本四大主義の実践～」と題して講話した。受講者20人。

柿崎講師は、大本が説く「清潔・楽天・進展・統一」の四大主義について説明し「心身ともに清らかに保ち、今という瞬間にベストを尽くしながら、前向きに努力することが大切」と述べた。

みなづきの集い

日　時	令和元年6月23日（日） 午前9時（受付）～午後4時半ごろ
会　場	大本東京本部・東京宣教センター
参加費	1,000円
定　員	40人
持ち物	筆記用具
内　容	講話「世界の大本となるご神業」 （講師：猪子恒東京宣教センター長） 茶席入席、他
締　切	6月19日（水）
申込先	東京宣教センター・愛善宣教課

7月 東光苑祭典・行事予定

14日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭

17日（水）午後7時～8時30分
21世紀生きがい講座（航空会館・新橋）
講題　生命の重さを考える
～大本と生命倫理活動～
講師　斉藤　泰（教学研鑽所事務局主幹）